

3.長岡京跡右京第995次(7ANKSM-16地区)・ 開田遺跡・開田古墳群発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、御陵山崎線地方交付金(街路)業務委託に係る埋蔵文化財発掘調査等であり、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京新条坊では右京六条一坊十五町の北西部に該当する。長岡京期跡のほか、縄文時代から中世に至る集落跡と知られる開田遺跡の北東端部にあり、古墳時代後期に築かれた開田古墳群の南端部に位置する(第1図)。

調査地周辺では、長岡京期の井戸跡や鎌倉時代以前と推定される掘立柱建物跡などが調査された右京第781次調査^(注1)、六条条間小路両側溝などを検出した右京第863次調査^(注2)などが実施されている(第2図)。今回の調査地は、右京第781次調査地点の北1トレンチの北延長部に位置する。

トレンチは、生活道路の確保、上・下水道などの埋設管を考慮し、調査対象地内を3か所に分けて設定した。トレンチ名は、南から順に1～3の番号を付けた。

各トレンチの基本層序は、上から現代の造成土、暗黒褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、黒灰色粘質土の順で堆積しており、遺構を検出した面は、淡黄灰色粘質土(砂礫を多く含む)の直上となる(第6図)。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会ならびに(財)長岡京市埋蔵文化財センター、地元自治会ほか、近隣住民の方々のご指導・ご協力を得た。記して感謝したい。当報告は村田和弘が執筆した。なお、本報告記載の国土座標値については、日本測地系を用いた。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹調査第3
係長事務取扱 石井清司
同 調査員 村田和弘

調査場所 長岡京市開田2丁目

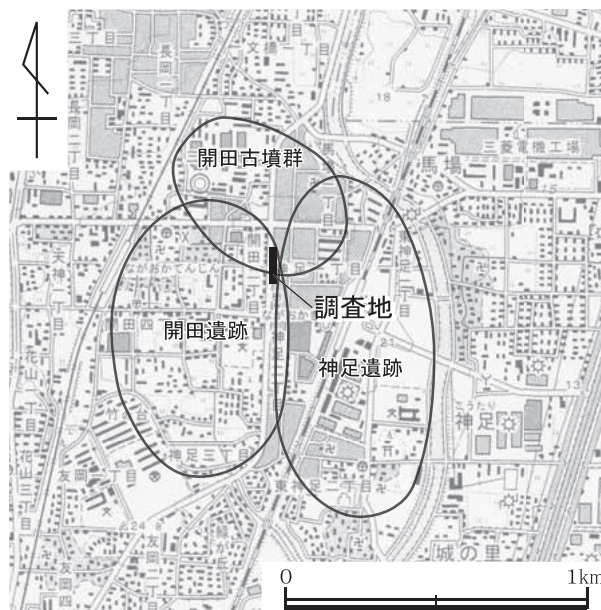
現地調査期間 平成22年4月26日～6月
2日

調査面積 146㎡

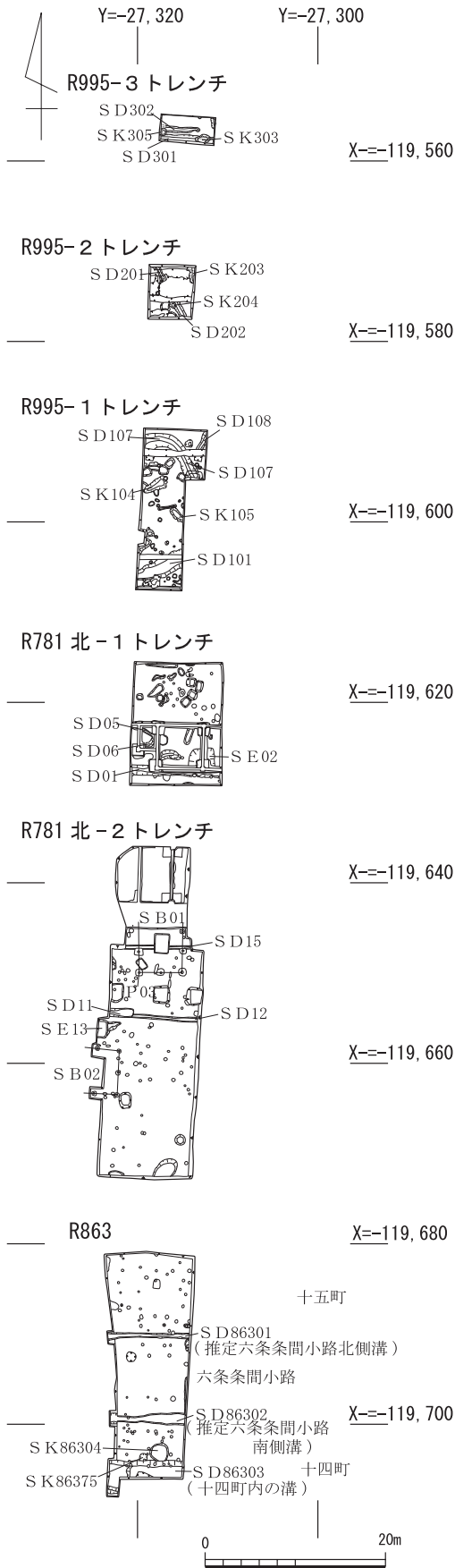
2. 検出遺構

1) 1トレンチ(第3・4・6図)

1トレンチでは、現地表面から深さ約0.7mで遺構を検出した。掘削土置き場の都合上、南側半分の調査を先行して行い、調査



第1図 調査地周辺主要遺跡分布図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)



第2図 調査トレンチと近隣調査地配置図

終了後に埋め戻しを行い、北側半分の調査を行った。

検出した遺構は、古墳の周溝と判断される溝や時期不明の溝(S D103~105・108)、土坑(S K102・106)、ピットがある(第3図)。

方墳S X109 溝S D101と溝S D107で構成される方墳である。規模は、最長で約12mを測る。墳丘および埋葬施設は、後世に削平を受けており残っていなかった。長岡京市教育委員会により開田古墳群東羅支群^(注3)第11号墳と命名された。

溝S D101 トレンチ南部で検出した上面幅約1.7m、深さ約0.2~0.4mを測る斜行する溝で、方墳S X109の南辺の溝と考えられる。溝が埋まった時期は不明である。遺物は、遺構内埋土の上層である暗黒灰色粘性土層から須恵器甕の口縁部が出土した。溝底の淡黒灰色粘性砂質土層から土師器の小型甕3点がほぼ完形品の状態で出土した(第4図)。

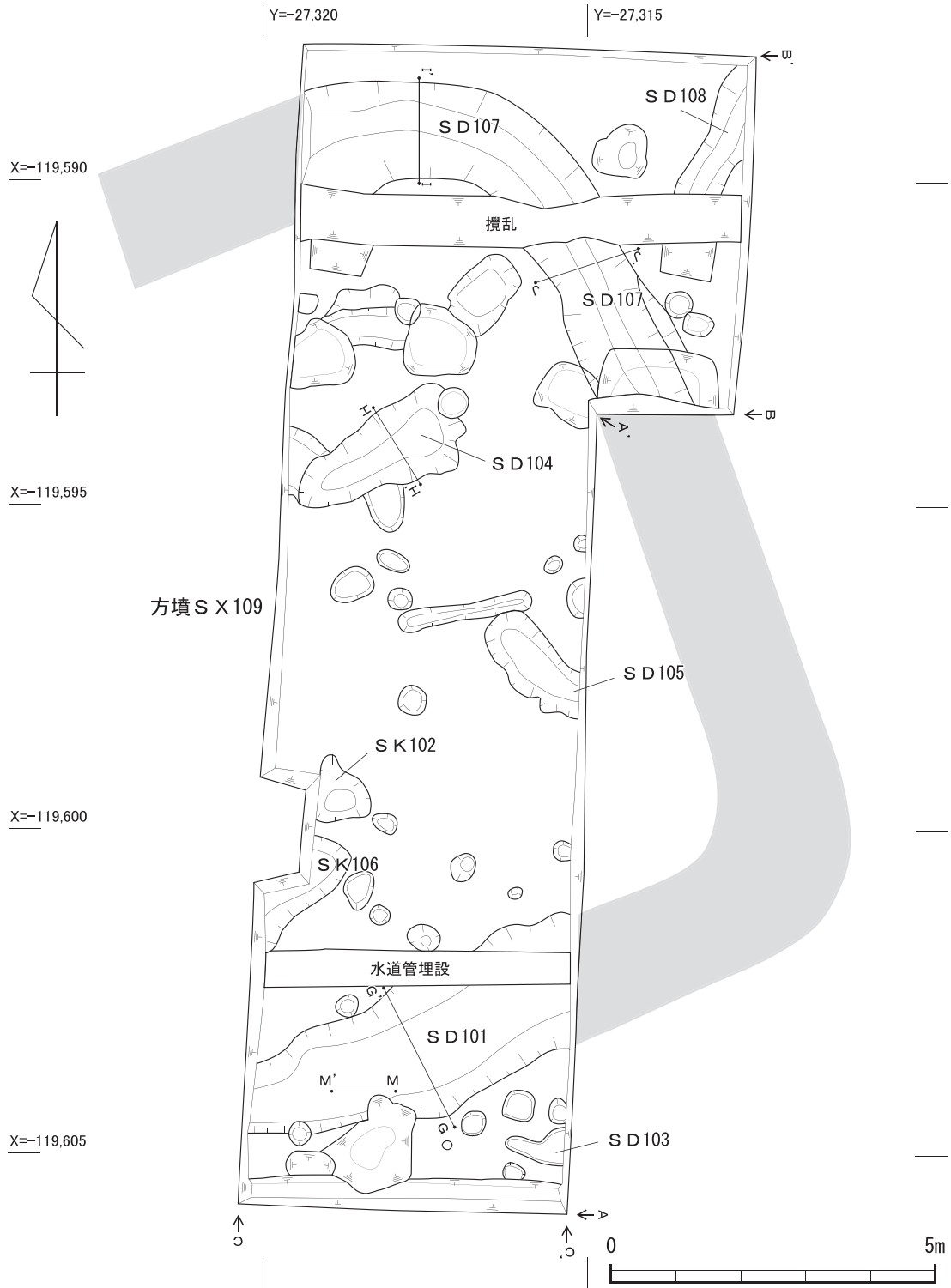
溝S D107 トレンチ北部で検出した溝で、南北方向に延びる溝が北端部で西へ屈曲する。上面幅約1.5m、深さ約0.5mを測り、溝の断面形は逆台形を呈する。方墳S X109の北辺から東辺にあたる。溝内からは、古墳時代の遺物しか出土していない。暗黄灰色粘質土層または暗黒褐色粘性砂質土層から須恵器の杯身・杯蓋、土師器の小型甕が出土した。

溝S D103 最大幅約0.6m、深さ約0.2mを測る溝である。検出した長さは約0.9mである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

溝S D104 幅約1.2m、長さ約3m、最も深いところで約0.6mを測る。西側で浅くなり、北西へ曲がる。遺物の出土はなく、時期は不明である。

溝S D105 幅約0.8m、検出した長さは約1.9m、深さ約0.5mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

溝S D108 トレンチ北東隅で検出した。幅約0.6m、検出した長さは約2m、深さ約0.7mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

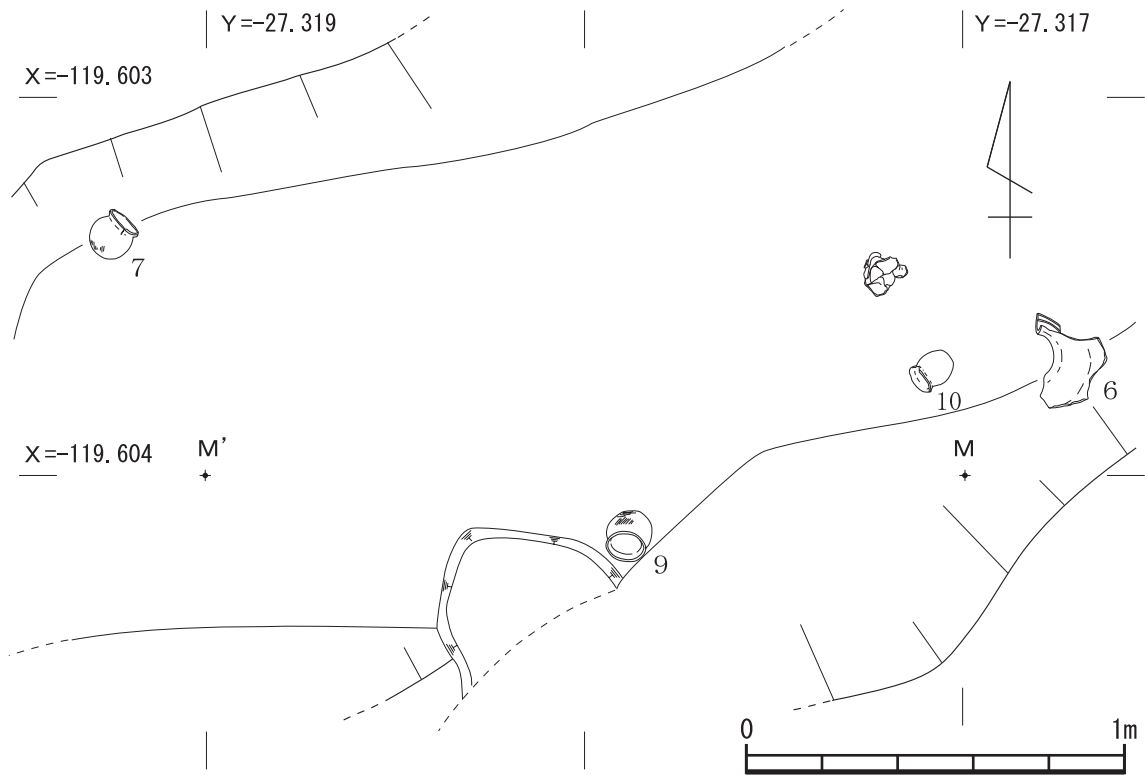


第3図 1トレンチ遺構平面図

土坑 S K 102 東西約0.8m、南北約1 mを測る不定形な土坑で、深さは0.3mを測る。遺物の出土はなく、時期は不明である。

土坑 S K 106 最大の長さが約 2 m、深さ約0.4mを測る土坑である。遺物は江戸時代と判断される陶器小片が出土した。

ピット群 25基のピットを検出したが、深さが5～10cmと浅く、柱痕跡はない。出土遺物が

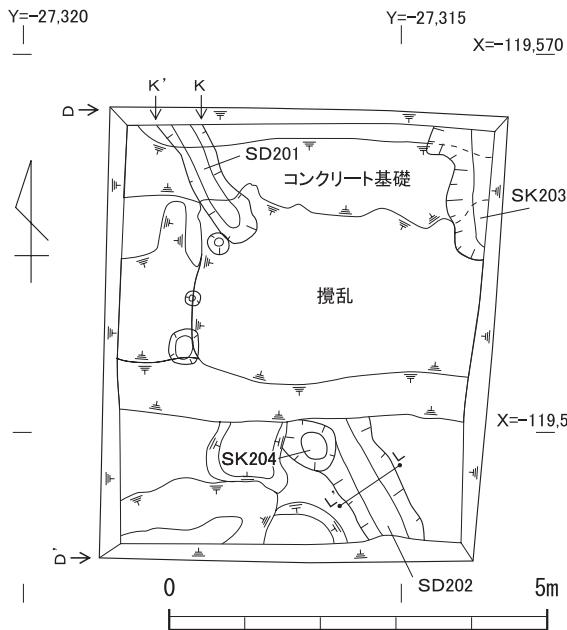


第4図 溝S D101遺物出土状況図

ないため、遺構の時期は不明である。

2) 2トレンチ(第5・6図)

中央部に設定したトレンチで、現地表面から約0.4mで現代のコンクリート片が混じる攪乱や江戸時代の遺物を含む包含層を確認し、現地表面より約0.6mの深さで遺構面を検出した。北半分については、近代および現代の建物の基礎などによる攪乱が著しかった。北半には江戸時代の遺物包含層(淡茶灰色粘質土)があり、多くの遺物が混入しており、土製の鈴や寛永通寶、煙管の



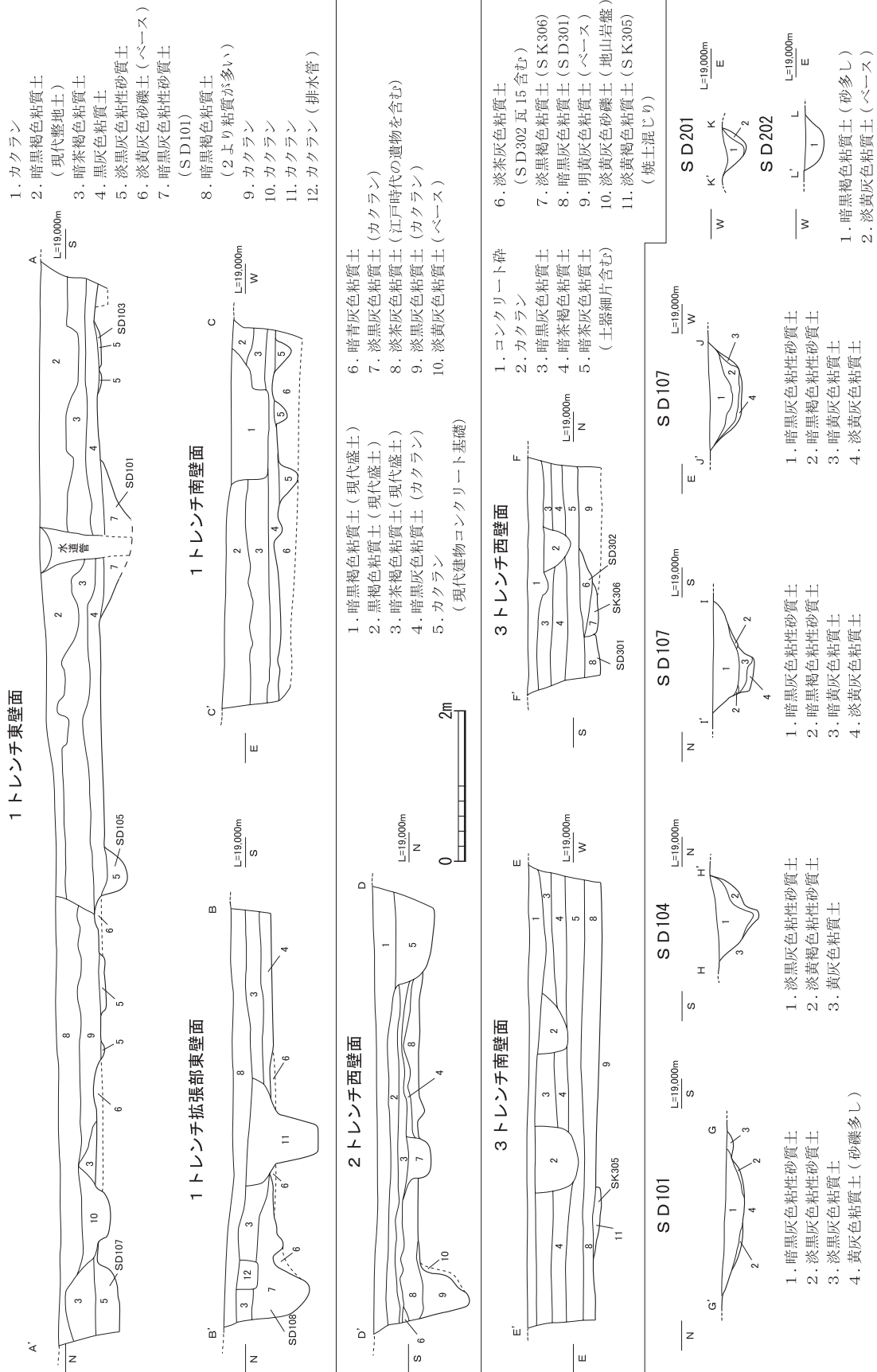
第5図 2トレンチ遺構平面図

雁首部分などが出土した。遺物包含層を除去したところで斜め方向の溝や時期不明の土坑などを検出した。

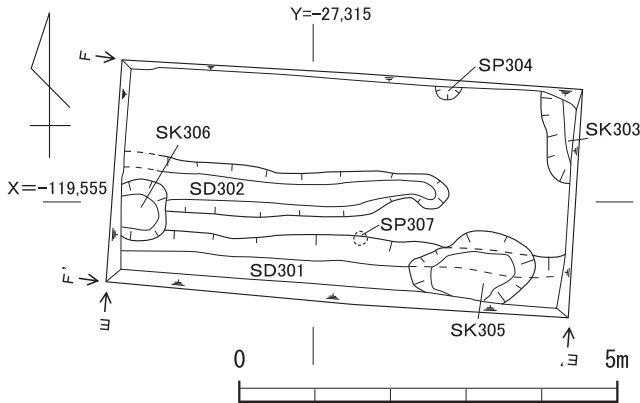
溝S D201 トレンチの北西隅部で検出した斜め方向の溝で、幅約0.5m、深さ約0.25mを測る。埋土からの出土遺物はなく、時期は不明である。

溝S D202 トレンチの南東隅部分で検出した斜め方向の溝で、幅約0.8m、深さ約0.4mを測る。溝S D201と同一方向であり、溝の埋土も同じであることから、同一の溝であったと判断される。出土遺物はない。

土坑S K203 トレンチの北東隅で検



第6図 トレンチ土層断面図



第7図 3トレンチ遺構平面図

出した不定形の土坑である。埋土から古墳時代のもので判断される須恵器杯の破片が出土した。南北2mにわたって検出したが、大半は調査地外に延びる。古墳時代と思われる須恵器片が出土していることから、同一面で検出している遺構は古墳時代の遺構の可能性も考えられるが、確証を得たわけではない。

土坑SK204 東西幅0.7m以上、南北幅は0.6m、深さは0.4mを測る。土師器の破片が出土しているが小片のため、時期は不明である。

ピット群 3基検出したが、遺物の出土はなく、時期は不明である。

3) 3トレンチ(第6・7図)

北端に設定したトレンチで、現地表から約0.7mで遺構面を検出した。検出した遺構は、東西方向の溝2条のほか土坑、ピットなどがある。

溝SD301 トレンチ南辺で検出した東西方向の溝で上面幅は0.6m以上、深さは0.25mを測る。遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。

溝SD302 溝SD301の北側に並行して検出した溝で、東側で途切れている。上面幅は約0.6m、深さ約0.1mを測る。埋土から近世の陶器片のほかに布目痕が残る平瓦の破片が1点出土した。

土坑SK303 南北1m、幅0.4m、深さ0.2mを測る土坑である。

土坑SK305 トレンチの南東隅部分の溝SD301下層で検出した楕円形を呈する土坑で、南北軸1.0m以上、東西軸約1.6m、深さ約0.25mを測る。土坑の埋土内には焼けた土や炭片などが混入し、長岡京期の須恵器蓋、土師器皿や甕の口縁部の破片が出土した。

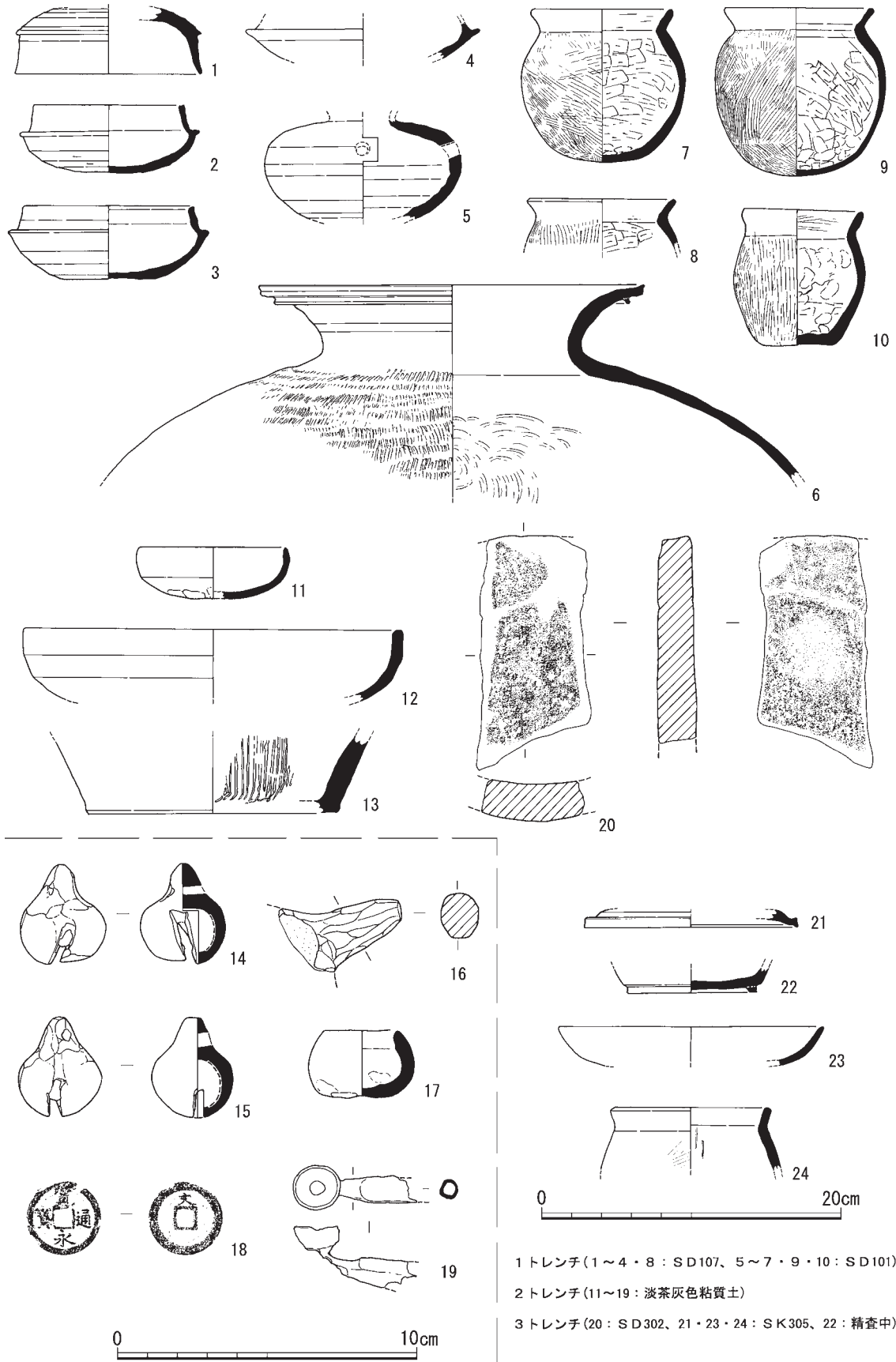
土坑SK306 トレンチ西側で溝SD301・302より新しい時期に掘り込まれた土坑である。遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。

ピット SP304・307を検出したが、深さが5cm程度しかなく、遺物の出土もみなかった。

3. 出土遺物(第8図)

1トレンチでは、古墳時代の遺物が中心で、方墳SX109の周溝SD101・107から出土している。2トレンチでは、コンクリート基礎などによる後世の攪乱層などから江戸時代の遺物が出土した。3トレンチでは長岡京期の瓦などの遺物が出土している。出土遺物は整理箱にして2箱である。

1～10は1トレンチで出土した。1～4・8がSD107から、その他がSD101から出土したものである。1は須恵器杯蓋で、口径12.3cm、器高4.45cmを測る。調整は、外面はヘラケズリ、口縁部は回転ナデが施されている。2は須恵器杯身で、口径9.9cm、器高4.55cmを測る。外面底部にヘラケズリ、口縁部は回転ナデが施されている。3は須恵器の杯身である。口径11.2cm、器高4.95cm、調整は外面底部にヘラケズリ、口縁部は回転ナデが施されている。4は須恵器杯身で



1 トレンチ (1~4・8 : SD107、5~7・9・10 : SD101)
 2 トレンチ (11~19 : 淡茶灰色粘質土)
 3 トレンチ (20 : SD302、21・23・24 : SK305、22 : 精査中)

第 8 図 出土遺物実測図

ある。5は須恵器甕の体部で、口縁部および底部が欠損している。6は須恵器甕の口縁から肩部にかけての破片である。口径26cmを測る。7は土師器甕で、口径9.4cm、器高10.4cmを測る。外面はハケメ、内面はヘラケズリがみられる。8は土師器甕の口頸部で、口径9.9cmを測る。9は土師器甕で、口径10cm、器高11.4cmを測る。外面にハケメ、内面はヘラケズリがみられる。10は土師器小型壺で、口径8.1cm、器高9.1cmを測る。外面にハケメ、内面はヘラケズリがみられる。須恵器の杯蓋・杯身(1～3)は、陶邑編年TK23～47並行期に属すると考えられる。また、土師器の小型甕(7～10)は5世紀後半から5世紀末頃と判断される。

2トレンチで出土した遺物は11～19の江戸時代の陶器や土師質土器、土製品、銭貨、銅製品がある。11～13は第6図第8層除去後の遺構精査中に出土した。14～19は第8層の淡茶灰色粘質土(江戸時代の遺物包含層)から出土した。11は土師質皿で、口径9.9cm、器高3.4cmを測る。12は土師質大皿の口縁部片で、口径25.6cmを測る。13は陶器の播鉢の底部片である。14・15は土製鈴で、内部には音を鳴らすための玉が入っている。16は土製人形の破片と思われる。17は手づくねのミニチュア土器である。18は寛永通寶で、19は銅製の煙管の雁首部分である。

3トレンチで出土した遺物は20～24である。20は溝SD302出土の平瓦の破片であるが、近世の遺物と混在して出土している。内外面に布目の調整がみられる。21～24は土坑SK305から出土した。21は須恵器蓋、22は須恵器杯Bで高台径は8.8cmを測る。23は土師器皿の口縁部で、24は土師器甕の口縁部片である。内外面ともに磨滅が激しいが、外面の一部にハケメがみられる。

4. まとめ

今回の調査は、調査対象地内に3か所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。1トレンチでは長岡京期と断定できる遺構・遺物がなく、後世に削平を受けた可能性が考えられる。一方、長岡京造営以前の古墳時代中期と判断される2条の溝SD101・107を検出し、この2条の溝から一辺約12mの方墳を復原することができる。墳丘および埋葬施設は既に削平されたが、深く掘り込まれた周溝だけが残っていたものである。出土遺物から5世紀後半から5世紀末頃と考えられる。調査地周辺では開田古墳群の存在が知られており、そのなかの1基と捉えることができるため、開田古墳群東羅支群11号墳と命名された。

今回の調査成果により、古墳時代中期と考えられる古墳が新たに確認できたため、周辺に同時期の古墳が存在する可能性が高くなった。

注1 松井忠春ほか「長岡京跡右京第781次・神足遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第112冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004

注2 戸原和人「長岡京跡右京第863次(7ANKSM-15地区)・開田遺跡・神足遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第119冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006

注3 同古墳群の調査には以下のものがある。

岩崎誠「長岡京跡右京第496次東羅古墳群発掘調査報告」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第7集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1996

圖 版



(1) 1 トレンチ遺構検出作業風景
(南東から)



(2) 1 トレンチ完掘状況(北から)



(3) 1 トレンチ溝 S D101
完掘状況(北から)



(1) 1 トレンチ溝 S D101
遺物出土状況(北から)



(2) 1 トレンチ溝 S D107
検出状況(北西から)



(3) 1 トレンチ遺構掘削作業風景
(北西から)

(1) 1 トレンチ溝 S D107
検出状況(西から)



(2) 1 トレンチ溝 S D107
完掘状況(西から)



(3) 1 トレンチ溝 S D107
土層断面(西から)





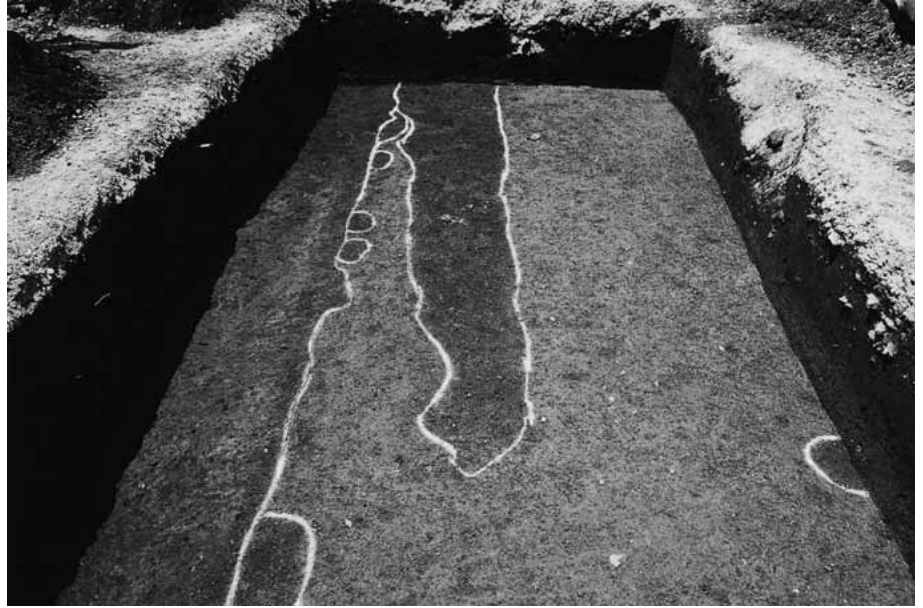
(1) 1 トレンチ溝 S D107
遺物検出状況(東から)



(2) 2 トレンチ遺構検出状況
(南から)



(3) 2 トレンチ遺構完掘状況
(南から)



(1) 3 トレンチ遺構検出状況
(東から)



(2) 3 トレンチ遺構完掘状況
(東から)



(3) 調査地近景(北から)

